インター

新川敏光

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ

セバスチャン・ルシスキルエ
新川 構想の Tested シェフ後、一九九〇年の日本経済化復興計画の成功を Leaf ゼロの一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すことに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達しているわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すことに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達しているわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すことに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達しているわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すことに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達しているわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すことに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達しているわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すことに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達しているわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すことに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達しているわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すのに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達しているわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すのに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達しているわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すのに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達しているわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すのに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達しているわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すのに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達しているわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すのに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達しているわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すのに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達しているわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すのに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達しているわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すのに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達しているわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すのに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達しているわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すのに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達していないわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すのに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達していないわけではなく、それは構想構築の過程であり、一九九〇年代の改革という。とりわけ構想の成功を Leaf 花と示すのに起因がある。しかし、これは構想自体が目標をomerservi に達していないわけ].
アベノミクスをどう考えるか

新川 ここでは、過去の問題を提起した「アベノミクス」について、私なりの観点から考察してみよう。アベノミクスは、過去の経済政策の問題を提起したとされるが、それは実際にはどのような背景があるのか。

この考え方は、政策の歴史と経済的観点を考慮に入れたものである。特に、アベノミクスの政策として掲げられた「三支点」（不動産や株価の上昇、賃金の増加、消費者の生活を改善）に焦点を当てた考え方は、歴史的な視点からも注目される。

まず、消費者の関心は「不動産や株価の上昇」に向けられているとされる。しかし、この観点からすれば、消費者の生活が向上していないのは明らかである。これからの政策が、本当に効果を上げるためには、消費者の生活を実際に改善する必要があります。

さらには、賃金の増加が見られないことも問題である。アベノミクスの政策において、賃金の増加が見られたとしても、それは消費者の生活が向上している証ではない。消費者の生活を向上させるためには、賃金の増加が足りないと言わざるを得ない。

このため、消費者の生活を改善するための政策が必要である。アベノミクスの政策が消費者の生活を改善するための手段であるとすれば、消費者の生活を改善するために必要な政策が、アベノミクスの政策よりも重要であると考える。

したがって、アベノミクスの政策が消费者の生活を改善するための手段であるとすれば、消費者の生活を改善するために必要な政策が、アベノミクスの政策よりも重要であると考える。
EUとユーロの行方
イギリスショックのあとで

6月23日、EU離脱を問うイギリスの国民投票が行われ、大いの予想を裏切り、僅差ながらも離脱派の勝利に終わった。投票結果の分析から見えたのは、イギリス社会にいくつもの深刻な亀裂が走っている現実だった。それが国民投票をきっかけに、国内の政治システムをもっとも脱動させようとしている。

一方、EUにとっても打撃は大きい。史上初めて加盟国が脱退する事態になるが、先に「EU解体」を見た数倉もいる。これはEUではなくユーロの危機だという見方もある。

冷戦終結後、国家を超えたグローバル資本主義のもとで、一国の国家主義も民主主義も緊張関係に置かれている。そのなかでイギリス国民が求めたものが何だったのかを考えると、今回の事態が起きようした理由は、イギリスに限ったことではないにしろ気にかかる。この国民投票がもつ意味は、今日、我々が思っているよりはるかに大きいかもしれない。

ヨーロッパと日本の論者がユーロとEUの行方を読み解く。
三分の二後：政治課題

EUとユーロの行方—イギリス・ショックのあとで

1. 日本経済の大転換
2. 戦後日本公害史の教訓